

書評 高橋留理子詩集『たまどめ』

働哭から美しい祈りへ

洲 浜 昌 三

同じ島根県内に住みながら、高橋留理子さんは長い間ミスティアスな詩人だった。

四〇年以上前、高橋さんの詩は同人誌『出雲文学』（昭和四七年創刊）に載った。抽象的な詩が多かったが、純粹さを一途に求める厳しさ、そこから生まれる崇高さと同時に、ガラスのように壊れそうな脆さや、詩の中に不意に出てくる生理的率直さには奔放で自由な感性があった。これほどナイーブな感性で詩を書く人は、当時の島根の同人誌にはいなかった。強く印象に残ったのだろう。

その後、高橋さんに関する記憶は全く空白だった。県内の文学仲間との会合などは何度もあったが、そういう場で高橋さんに出会ったことはなかった。

三十年以上過ぎた平成二十一年（二〇〇九）、島根県民文化祭文芸部門詩の部で、高橋さんは県知事賞を受賞。受賞式後の合評会の席で初めてテーブルを囲んで身近に言葉を交わした。その時の受賞作品が、今回の詩集の題名にもなった「たまどめ」である。

高橋さんは三十数年の間には、ご主人の転勤で広島に住んでいたこ

ともあり、病気を患っていた時期もあったという。生まれが群馬県安中市、幼少のころ出雲市へ移ったこと、『出雲文学』時代は二十代前半だったことも今回はじめて知った。

詩作を中断して二十年。なぜ再び詩を書きはじめたのか。「あとがき」の冒頭に明確に記されている。

「この詩集を、今は亡き、愛する兄、月岡健一に捧げたい。

兄は戦争遺児であり、母の再婚によって私は生まれた。兄は常に葛藤を抱えていた私の両親の狭間で、痛ましい人生を生きねばならなかった。この上なく優しい人であった。戦争がもたらした彼らの不幸の上に、私は存在している。兄を失った働哭のさ中であって、不意に私は（書かずにいられない…）という衝動に似たものが、胸の奥深くに湧き上がるのを感じていた（略）」

「書かずにはいられない衝動」も無く書かれた詩と違って、言葉が遊離せず、心に響く感動的な詩が多いのは、「胸の奥深く」から突き上げてくるものが言葉を生みだし、しっかりと支えているからである。

「たまどめ」とは、縫い物をするとき、糸が抜けないようにつくる糸の玉である。詩は次のようにはじまる。

「わたしのつくるたまどめが／おおきすぎるといつて／ひとにわらわれたことがあります／（略）よがよなら きつとわたしは／千

人針をぬうのがじょうずだったでしょう」

母なる人たちが、さらし木綿を持って辻辻に立ち、千人の女性に針ずつ縫い玉を作ってもらい、出征していく息子や夫、兄弟たちの武運長久を祈って持たせた千人針 ー

「とおいみなみのくにのしまじまの／みつりんや／どろのなか／うみのみなそこ／かえんのなか／こっかんのとうどにあのようにもむなしく／くちはたのです／(略) つくろいものをするとき／つい おおきなたまどめをつくっては／わたしのころは／かなしみにふるえずにはいないのです」

素朴な祈りのように、「ひらがな」に託された深い思いが伝わってくる。「かなしみにふるえるころ」には、兄やその父、それに連なる戦争で失われた無数の命への悲しみと鎮魂があり、未来への不安や心配も伝わってくる。だから、「おおきなたまどめは／しんぱいしゅうのあかし…」 「おおきすぎる」と人に笑われても、「つい おおきなたまどめ」を作ってしまうのである。秘められた反戦への意志が奥底に横たわっている。

詩集は四章、四十編から成り立っている。

I章「たまどめ」は、兄を回想した詩を中心に、シンガポールにもいた母や叔母、ルソンで戦死した父なども出てくる。福島の大震災を語った六ページの散文詩もある。

II章「冬物語」には、冒頭に新作も一編あるが、二十代に作った詩が中心。聖書を素材にした「ロトの妻」や原罪、芸術論に関する抽象的、思索的な詩が多い。

III章「聖衣」は十ページに及ぶ長編力作詩・「扶余紀行・女人哀歌」ではじまる。さらに「背理」「神は」「選択」「識別法」「ある種子について」「愛と受」などの作品で、人類や社会や人生など大きな舞台で、聖なるものとは、神と現実、希望、愛、など、理想と現実の狭間で葛藤して生まれた詩が、心を打ち思索の世界へ誘う。

IV章「家族の肖像」では、皿のように壊れかねない家族への不安や危機感を底流に、喜びや感謝、希望が温かい眼差しで語られる。「家族の肖像」「二つの祖国」「その日」「眠れない」には、韓半島で暮らす二人の孫娘への愛と不安がせめぎ合い高い次元の祈りとなって詩に結晶している。

「お母さんの国では 小学校六年の歴史の授業で／お父さんの祖国の非道 韓国併合の事を教えるのだそう／日本の祖母ちゃん私は デリケートなゆみが／俯いてべそをかきそうになっている姿を想像し

て／胸がズキンとなるのだ」(第三連)

車のハンドルを握りマイケル・ジャクソンを聞きながら考える。「じや どうすればいい？」

「車の窓を開けると 潮の香りが満ちて来る／そうだ「その日」にはきつと／今より少し背中丸まった祖母ちゃん私が／校門のところに待っているはず……／ゆみとゆなを 力いっぱい抱擁するために」(第六連 「その日」より)

言葉ではなく、子どもたちへの無言の愛が胸を打つ。

「チマチヨゴリも振袖も美しい／類似と相違の混沌が／おまえの人生を豊に彩るだろう」(二つの祖国)

これは愛と不安が止揚された希望であり美しい祈りである。

二十代の時に高橋さんが書いた詩は、感性や直感で書かれた抽象的な詩が多かった。

しかし、今回の詩集のそれぞれの詩には物語性がとても豊かである。詩を構成し支えている骨格は人物や歴史を中心にした物語性である。現実や事実を踏まえて物語を構築し、作者の思いや思想を表現する―それは小説など散文の特徴である。とは言え、それぞれの詩は、随筆

や小説など散文ではない。物語性に富んだ詩である。物語は記憶に長く残るといふ特徴がある。

作者は、歴史や現実から目をそらすことができない。だから「思い」は時間的意識を通して散文に近い形になるのだろう。

詩は一瞬に属するというが、高橋さんにもその資質は人一倍ある。「文学少女」だった高橋さんは、感性がとても高く抽象的な思考も豊かである。若い時には教会へ通っていたこともあり聖書の知識も豊富で精神性も強い。それは詩集の底流となり、表現となって詩の細やかな質感を生み、詩を支えている。

「眠れない……」は詩集最後の詩。親に虐げられる子、二つの祖国の狭間に生きる孫、砂漠で流される血：次々浮かんできて眠れない。やがて一つの像『ピエタ』が目に見えぬ。深遠な思いを『ピエタ』の一語に託して詩集は終わる。

磔はりつけから下ろされたキリストを抱くマリア。母なる人の慟哭どうこくと大いなる愛―この詩集には長期間にわたる多彩な詩が収録されているが、作者の「思い」は深い祈りのように伝わってくる。

(この詩集評は、『コールサック』八十六号へ書いた文章を基に、少し手を入れている箇所があります)

